発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第186次）

藤原宮の中心部の下層には幅6～9m、深さ2mほどの大規模な南北溝が貫流しています。この溝は、宮の造営に関わる資材を運搬するための運河であると考えられ、現在までに藤原宮北面中門から朝堂院までの南北570mで確認されています。大極殿や大極殿院南門は、運河を埋め立てた後に造営されたことがわかっています。

1977年の第20次調査では、この運河から天武天皇末年の木簡が出土し、藤原宮の造営がこの頃には本格化していたことがあきらかになりました。このように、運河は藤原宮造営過程を理解する上で重要な遺構です。今回は大極殿院内庭の中央部南側で、藤原宮期の遺構を保存しつつ、南北約6mの範囲で運河を調査しました。

検出した運河の規模は、幅約6.7m、深さ約1.8mでした。最下層には粗砂が堆積しており、この層は運河が機能していた時のものです。この粗砂層からは多量の土器、木製品、種子類が出土しました。また、獣骨が大量に出土していることも特筆すべき成果で、これまで確認しているものには、馬、牛、犬等があります。特に馬については、完形の頭蓋骨が3個体出土しており、その年齢、性別、出自、利用方法等の解明が期待されます。

昨年度と今年度の調査で、大極殿院内庭の南半部の様相があきらかになりました。古墳時代から平安時代まで様々な成果があがり、今後の調査研究のための重要な資料が得られました。

（都城発掘調査部　大澤 正吾）

運河完掘状況（南東から、右奥が大極殿）

藤原京右京八条二・三坊の調査（飛鳥藤原第185-7次）

今回の調査地は、藤原京右京八条二坊の西辺にあたり、本薬師寺の寺域に隣接します。西二坊大路および八条条間路の存在が予想され、東側溝と西側溝が推定される2箇所に調査区を設けました。

調査の結果、7世紀後半から藤原宮期の遺構として、西二坊大路の東西両側溝と八条条間路の南側溝を検出しました。西二坊大路東側溝と八条条間路南側溝は逆L字状に接続していました。

また、西二坊大路の路面整地土下層の遺構として、東区では調査区を縦断する南北溝を、西区では調査区を横断する斜行溝を検出しました。東区の下層南北溝は西二坊大路東側溝のわずかに西側を並走していました。西区の下層斜行溝は、幅約2.7～3.7m、深さ約0.6～0.9mで、西二坊大路西側溝はこの溝を埋め立て、路面側、寺域側の両方を整地した後に、掘り込まれていました。

今回の調査により、当地における西二坊大路の施工過程があきらかになり、本薬師寺および藤原京造営の過程を考える上で、新たな知見を得ることができました。　（都城発掘調査部　大澤 正吾）

東側溝と南側溝、下層南北溝（東区、北西から）

西側溝（西区、北から）

発掘調査区全景（北から、右側が本薬師寺）